

<b>Title</b>	極限状況におかれた演劇人としての創作活動 : シャルロット・デルボの演劇的視点
<b>Author(s)</b>	鹿瀬, 颯枝
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 11(3): 43-53
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=569">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=569</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 極限状況におかれた演劇人としての創作活動

——シャルロット・デルボの演劇的視点——

鹿瀬 颯 枝

Oeuvre d'une dramaturge réduite à l'extrême

—— Point de vue théâtral de Charlotte Delbo ——

Satsue KANOSE

Dans les camps de concentration, une jeune femme française a, un jour, échangé un morceau de pain contre le “Misanthrope” de Molière. Elle a aussi voulu monter une pièce de Musset “Un caprice” avec ses compagnes. Cette jeune femme s'appelle Charlotte Delbo (1913-1985). Nous avons découvert son existence avec une grande émotion, lors d'un colloque international “Créer pour survivre - Ecritures et pratiques artistiques dans les camps de concentration nazis” qui a eu lieu à l'Université de Reims, le jeudi 21 septembre 1996. Pourquoi Charlotte Delbo a-t-elle choisi le théâtre comme moyen de “survivre avec dignité” face à l'extrême? Comment a-t-elle pu écrire ses pièces sur ce thème de la déportation? Et quand, ses chers personnages “Spectres” sont-ils apparus sur scène? Tout en cherchant les réponses, nous essaierons d'éclaircir l'univers sombre dans lequel a vécu Charlotte Delbo. Dans le même temps, nous tenterons de définir sa littérature comme “une littérature de la conscience” ou “une littérature de la raison d'être”.

一人の若きフランス女性が、第二次世界大戦下の強制収容所で生き延びるために、与えられた一切れのパンを一冊の文庫本、モリエール作『人間嫌い』と交換した。仲間たちとミュッセの『気紛れ』を「上演」しようとしたこともあるという。彼女が、シャルロット・デルボ Charlotte DELBO (1913-1985年) であった。1995年9月21日、ランス大学で開催された国際シンポジウム「生き残るための創作活動」“Créer pour survivre” 出席の折に、筆者は彼女の存在を深い感銘とともに知った。日本では未だ知られていないシャルロット・デルボが、「尊厳をもって生き残るために最小限度必要なこと」として演劇を選んだ経緯、並びに彼女がアウシュヴィッツから生還後に残した作品を、遅ればせながら取り上げ、一考察を試みたい。

---

**Mots clés;** Dramatisation, Extrême, Spectres, Auschwitz et après, Misanthrope, Charlotte Delbo

I

1. 存在理由（レゾン・デートル）としての文学

極限状況に置かれた人間が、尊厳をもって生き続けるためには、想像を絶する様々な形の精神的  
高揚が必要だった。日々、非人間性と闘わねばならなかった。国際シンポジウム「生き残るための  
創作活動」<sup>(1)</sup>とは、第一に、戦時下にナチズムの強制収容所に入れられていた生還者（特に、アー  
ティスト中心）と、戦後、ダッハウなどでヒアリングを続けてきたドイツのジャーナリスト、そして  
現在、各国（フランス、イギリス、ドイツ、ベルギー、オランダ、イタリア、アメリカなど）の  
文学者、研究者の出会いの場であった。第二に、それは実際に強制収容所で行われた創作活動を  
知り、極限状況で「尊厳」をもって生き延びることの意味を知ることであった。強制収容所の恐怖を  
生き延びた人たちだけが、その恐怖を語る事が出来るのだから。詩を読む人、それに耳を傾ける  
人、紙の切れ端を見つけ、表に裏にびっしりと絵を描く人、芝居の台詞を暗唱する人……シャルロ  
ット・デルボは、一切れのパンと『人間嫌い』を交換した。彼らは、収容所からの生還後、それぞ  
れの手段を用いて、創作活動を続けた。ツヴェタン・トドロフの言葉を借りるならば、「収容所の  
囚人は極限の経験を生きた。彼らが見たり、体験したりしたことを、まったく誠実に語ることは、  
人類に対する彼らの義務である」<sup>(2)</sup>。それが、彼らにとって、「その後」を生きる存在理由（レゾ  
ン・デートル）ではないだろうか？

2. シャルロット・デルボの創作活動

シャルロット・デルボは、その夫ジョルジュ・デュダックとともに、1942年3月2日レジスタ  
ンス運動のかどで逮捕された。ジョルジュ・デュダックは、モン・ヴァレリアンにて5月23日人質と  
して銃殺された。シャルロット・デルボは、8月24日ロマンヴィルに移送され、翌1943年1月24日  
アウシュヴィッツに収容された。1945年5月フランスに生還。その後、『ル・モンド』紙のインタ  
ビューに、次のように答えている。「私は収容所から戻った時、証言したいと思いました。誰かが  
アウシュヴィッツでの言葉、行為、終末を報告しなければなりません。各人が各々の武器を  
もって証言するのです。[……] 私は詩の言語が最も効果的だと考えました。何故なら、それが最  
も読者を深いところで動かし、戦う敵に対しては最も危険であると考えたからです。私は文学を一  
つの武器として用います、脅威が私にとって余りにも大きいからです」<sup>(3)</sup>。

戦前はソルボンヌ大学で哲学専攻の学生、占領下ではレジスタンスの闘士、そして、演劇人とし  
て、コンセルヴァトワール（国立演劇学校）、テアトル・アテネでは、ルイ・ジュベの忠実で熱心  
なアシスタントであっただけに、シャルロット・デルボの鋭い観察力は何ひとつ見逃しはしない。  
「観察し、記憶にとどめ、この経験を他者に伝えることで、ひとはすでに非人間性と闘っている」<sup>(4)</sup>

と、ツヴェタン・トドロフが、『極限に面して—強制収容所考—』に述べているように、彼女はすでに非人間性と闘っていた。彼女は、「記憶」を作品にした。それは同時に、想像の作品でもある。著者は、自分自身を第三者のように外の世界へ投影する。また、自分の愛しき仲間たち、「亡霊たち」<sup>(5)</sup>を内面世界に取り込んでしまう。「亡霊」とは何か。それは、アウシュヴィッツへの絶望の旅を続ける著者が、旅の同伴者に選んだ愛読書の主人公、ファブリス、オンディーヌ、アルセスト、エレクトルたちに他ならない。彼等の登場と退場が、シャルロットの強制収容所での経験とどのように関わっているのか？ 彼等はいかなる状況で現れ、いかなる状況で姿を消すのか？ 消えたはずだったアルセストは、「君から離れてはいなかったよ」とも言う。すべて、彼女の意識の流れに沿った作品がここに創られるのである。

シャルロット・デルボの作品は、常に絶滅の危機に脅かされている自分たちの存在状況から可能な限り離れて、内面世界に入り込み、同時に、大半の人には想像もつかない世界へと、外界との境界地帯へと開かれてゆく。それは、透明であることを望むが、手段によって注目をひくことは決して望まない、ある種の言語の正確さと純粋さによって息づく作品である。あらゆる限界状況を超えることを知り、そこに描かれ、表示されている肉体と影響力のある明晰な精神の境界に到達したことを示している。

前述のシンポジウムで、ロゼット＝クレマンチヌ・ラモンは、デルボの作品を「良心＝意識の文学」(“Une littérature de la conscience”)と呼び、「シャルロット・デルボの信条は、書かれた言葉、すなわち、文学の中に定着している。同時に彼女は、現在増えて来ている読まない人々に対してもメッセージがあり、それは歴史によって握りつぶされることを余儀なくされている人たち、記憶の切断をされた人たちのためのメッセージである」<sup>(6)</sup>と切り切っていたのが筆者の印象に残っている。

## II

シャルロット・デルボ作『亡霊たちよ、わが仲間たちよ』

鹿瀬 颯 枝 抄訳

Charlotte DELBO “SPECTRES, MES COMPAGNONS”

Traduction abrégée par Satsue KANOSE

### A. まえがき<sup>(7)</sup>

「詩人による創造物は、肉体を持つものではない。故に、私は彼等を亡霊たちと名付ける。彼等は血と肉を持つ被造物よりもはるかに本物らしい。というのも、彼等は尽きることのないものを持つ

っているから。だから、彼等は私の友人たちであり、仲間たちである。人間存在の繋がりにおいて、人間の歴史の繋がりにおいて、私たちは彼等のおかげで他の人々に再び関わり合えるのだ。」

シャルロット・デルポー

1972年10月10日

## B. シャルロット・デルポーからルイ・ジュベへ未完の手紙<sup>(8)</sup>

親愛なるルイ・ジュベ

もしユリディスが帰ってきたら、そしてあなたにデートしてとお願いしたら、きっとあなたは彼女にO.K.を出すでしょうね。特に、お芝居に行くためだと彼女が言うとならば、なおさらのこと。私の旅に比べれば、彼女のそれは妙なエクスカッションにしかすぎませんでした。私は彼女の地獄をドロットニングホルムで見たのです。何とそれはひどいのでしょうか！これらの、翼をつけた、しかめつらの、いくつかにわかれた、角を生やした悪魔たち？ 私が見た者たちを示すには、もう一つの違う言葉が必要でしょう。地獄の炎が燃え上がる閃光。人間の肉体を感じさせない、見事な柔らかな炎。しかし、私はそこから生還したのです。私が戻ってきた地獄は、夢ではなかったのです。演劇とどういう関係があったと言えるでしょう？ それにしても……

この困難で根気が要る想像の推敲は、夢みたいなものだったのでしょうか？ 想像の世界を再構築することが、時には、私が生きている現実よりももっと現実的になるに違いないということは、たわごとを言うことだったのでしょうか？ 私がいた本当の世界、もう一つの世界を疑い始めている時に、今日、私の中に存続しているということだから？ 希望のないまなざしのあの囚人は、私だったのでしょくか？ あるいは、無感覚なエレクトルだったのでしょくか？ もう私にはわかりません。

あなたはヴァロリスを覚えていらっしゃるかしら？ 戦争の始まる前、1939年夏の日々のことを？ 多分、もうあなたの記憶から遠のいていることでしょう。あれから随分旅をしましたわ。私にとってそれは、運命の始まりでした。

## C. アウシュヴィッツへと向かう強制移送列車、アルセストの登場<sup>(9)</sup>

列車は二日二晩走っていた。東の方へ、さらに遠く東へ。静かな闇の中——車輪の音が沈黙の中に溶け込んでいた、そして、その沈黙に息が詰まりそうだった——ひとつの、ある声私を驚かせた。まだ私の親友たちではなかったが、まさにそうならうとしていた人たちが、ほんのわずかの間、私のそばで眠っていた——あるいは、恐らく、彼女たちは、私のように、それぞれが自分のために、それぞれの価値とか悔恨の総括をしていたのだろう。私たちは、ごく最近の過去の中にまだ閉じ込められていた、突然、それは無用になってしまった。そのごく最近の過去が無用であることを認めるためには、大きな明晰さが必要だった、しかし座礁したいかだのように、あらゆる方向にそれを

ひっくり返すことができた、人には、次のように言うことができた。ここで私の過去が止る、東へと走る貨車の暗闇のここで。ここで私の過去と同時に未来も止る。誰が希望を持つことができたというのか？ 誰が希望を持っていたというのか？ 誰も希望など持っていなかったのは確かだ、その素振りをするのは虚勢でしかなかった。

ある朝、収容所で死へと向かうG。(夫のジョルジュ・デュダック)をそのままにしてしまった私、共通の私たちの人生に別れを告げた私——別れを告げるということは、G.と共通の私たちの過去すべてを棄てるということだった——、私はこの旅でさらに孤独であり何もないこと、さらにもろさを感じた、何故なら、その時まで私が持っていた、愛されているという確信がなくなっていたから。私と私の愛の間にますます大きくなっていくこの隔たり、この愛が打ち砕かれ、踏みにじられたから。出発しなければならなかった、その用意ができていようと、なかろうと。仲間たちの面影が夢に出てくるものよりもっと幻想的だったこの暗い貨車の中で、私は大きな声で心の痛みを語る時、自分たちの孤独を押し量ることにとらわれている私の仲間たちの心中を察していた。私は自分自身のために語っていた、どのような返答も待っているわけではなかった。

「どうして、そんなに孤独を恐れるの？ 孤独は時には、同伴者よりももっと豊かな存在なのに、それに同伴者ほど失望もさせないし……」

「あなたは誰？ そんなふうには話しているのは、あなたなの？」影が濃くなるように暗闇の中で固まってきた影に向かって、私は訊ねた。「孤独だけというわけじゃあないわ、距離もまたあるのよ。あなたは誰なの？ 孤独も距離も恐れないと言うあなたは？」

「アルセストだよ。」

「アルセストなの？」驚いた調子ではなく私は言ったが、本当は随分長い間私をこんなに驚かせたことはなかった。「アルセスト！」喜びの声で私はその名を呼んだ。

どのような状況下であれ、出会って嬉しい人々がいる。どのような説明も予期していない人に対しては何も訊ねることなく、会話を始めるといった風情で、私は語った。「アルセスト？ 私たちと一緒に旅をするの？」

「そう、君と一緒に。」

「私と一緒に砂漠へと旅立つために？ 砂漠を理解する何とも不思議な方法ね……」

「笑わないで欲しい」アルセストは答えた。「本当の砂漠は我々の世界に存在しているんだ、惑星からかけ離れている、君が行こうとしているこの部分を除いてね。選択の余地はないよ。」

「多分、砂漠の中での選択の余地はね、でも、そんなふうにして、あなたはどれくらい他のもっと面白い旅を逃してしまうことでしょう。」

私は、ごく自然にアルセストと仲間表現をしているのに気付いた、まるで、人が恋におちた時のように、まるで、いかなる慣習も存在していないかのように。随分と長いこと、私たちの間に既に存在している親密さの意識があったからなのだとは私は理解した。

「あなたが行きたがっていたのは、私たちが行くこの砂漠なの？」

「もっと前から僕は出発すべきだったんだ、だけど、これは本当の出発なんだ。」

こんなふうにして、演劇界のヒーロー、アルセストは、人間味のあるヒーローの素質、つまり、勇気があることを私は知った、私が強制的に連行される場所へ、彼は選択の自由によって私に付き添っていかうとする、それはまた何という強制力であり、武力であり、軍事的なのだろうか！

列車が止った。三日目の夜だった。何か策略らしきものがあった、緩衝器の音に、押されたり、ぶつかったりしながら、私たちは引き込み線を通っていることが分かった。私たちは朝まで動かなかった、そして朝まで、私はアルセストと話しをしていた。彼と話しながら、自問していた一つの質問が、つきまとして離れなかったからだ。「だけど、どうして彼は私に付き添ってくれたのだろうか、この私に？」砂漠への愛着というのは十分な説明ではなかった、特に、この不思議な夜にアルセストが語る声の調子の変化に対しては。彼は私を愛してくれているだろうか？ 私は控えにめに自問してみる。当然のことながら、それは不可能だった。セリメーヌの後に私を？ どのようにしてそれを信じられよう？ しかし……何故、彼が私を愛さないといえようか？ セリメーヌは軽薄で、移り気な女。私は全く正反対、真面目で、そして、おそろしく貞淑な女、アルセストにとても近かった、彼をほとんど滑稽にしてしまうほど要求の高い非常識な面において。要するに、彼が私を愛することはあり得た、砂漠で避けていた彼のこの部分と一致していた。だが、セリメーヌの魅力、美しさ、はかなさ、きまぐれな性格、欠点すべてがアルセストを魅了していたのか？ それでは、アルセストが私に恋をすることは不可能なのか、人が夢中になるのは、当たり障りのない面では決してないのだ。確かに、アルセストの中にある真面目で奥深いものすべて、責任と義務の感覚を持つものすべて、それがアルセストと私を近づけているに違いない。だが、私に付いて来るなんて！ 狂気の沙汰だった、アルセストが私に夢中になっているのはもっともだとしても。人々が良識による異議申し立てにほとんど気をとらわれないような時に、愛されていると信じられることはとても安らぐ。私に付いて来るには、アルセストが私を愛していなければならなかった、他に説明の仕様がなかった。それなら、友情？ 私は見出した。アルセストが私に付いて来ることを決めたのは、友情からだった、私はこの気高い心の持ち主にこんなに尊い感情を抱き、とても幸福だった、愛よりももっと限りなく高い位置に友情を置かねばと私は決意した、それでもなお、質問せずにはいられなかった。

「何故、セリメーヌと一緒に残らなかったの？ 何故、あの勝負を諦めたの？ 愛は敗北を認めないはずよ。」

「実際のところ、僕が本当に彼女を愛していたかどうか自問してしまうんだ。それに、僕は勇敢に生きたかった、唯一真実の、人間らしい冒険に参加したかったんだ、セリメーヌは僕に装飾品しか求めなかったよ。」

「人間らしい冒険ですって、砂漠のことなの？ この砂漠のこと？」

「おそらく唯一の砂漠だよ、人間が人間性まで失ってしまう砂漠さ。」

「だけど、どうしてジュベとも別れたの？ 彼こそ私たちの時代にあなたを生き続けさせ、再び演じさせることのできる人なのに？ 影の人物のままにいるほうがいいの？」

そして、私はつぶやいていた。「彼のために存在する世界、ありふれた尺度による情熱あるセリメヌの世界で生き続けるチャンスを彼が諦めるのは、私にもっと付いて来るためなのかしら？」貨車から出た時に私を待っている運命がどんなに途方もないものか、私はまだ知らなかったのだ。それに、私がそれを知った時、こんな危険を冒してまで、地獄に墮ちることを受け入れるなんて、万に一つしかそこからはい上がるチャンスはない地獄行きを受け入れるに値するかどうか、私は自問した。

「そう、僕はジュベと別れた」と、アルセストは、おもむろに答えた。彼の声には後悔の念が混じっていた、セリメヌの取り巻きであった時の優柔不断を再び感じた。

こうしてアルセストは、私に付いて来たのだ。この勇気があったのは彼ひとりだった。恐怖を乗り越えてみせる用意がいつでも出来ている、絶対的なものを渴望してやまないあらゆるヒーローの中で、何故、彼だけなのか。ドン・ジュアンは、何故、来なかったのか、彼なら喜んで身を投げ出す地獄、ほとんどそれを恐れていなかったことを、説教を垂れるすべての人達やスガナレルに示すためだけにでも、来ればよかったのに。いや、ドン・ジュアンは、可愛い娘たちがいたにもかかわらず、来なかった。出発点では、かなり可愛い娘たちがいた、旅の道中、髪についた数本の麦わらを振り払うために娘たちが髪を揺する時、彼なら、きっと、胸をときめかせたにちがいない、何故なら、貨車の床には細かく分けられた麦わらの束があったから。ドン・ジュアンは、きっと結婚の約束をしてしまったかもしれない可愛い娘達がいたにもかかわらず、そこにはいなかった。だけど——今になって、思い出す——旅の始まりには、私たちの中に彼の姿を見たのだ。最初の乗り換えで、暗く不吉な家畜専用列車に乗らなければならなかった時、ドン・ジュアンは消えてしまった。彼は自分の好奇心と見栄っ張りの代償をそんなに高く払いたくはなかったのだ、自分は何ひとつ恐れていないと確信したがる彼なのに。しかし、誰の傍らで、誰を前にして、彼は大法螺を吹き、挑もうというのだろうか？ 私たちの誰もが、彼に対して我慢をするような気分ではなかった。女から男までノーマルな関係の社会では、実に超然とした、実に魅力的なドン・ジュアン、彼の秘密を見抜きたい人達すべてを魅了してしまうドン・ジュアンが、自分自身の関心を見失ってしまった。これからは、彼の秘密なんてどうでもよかったのだろうか、彼の神秘なんてどうでもよかったのだろうか、死にゆく女たちにとっては？ ドン・ジュアンは、私たちから離れていった。

#### D. エルミオーヌ、ロドリグの不在、アルセストの退場<sup>(10)</sup>

エルミオーヌ、彼女は力と暴力の化身、いかなるものも彼女に歯止めをかけることはできなかった。私は彼女を捜していた。彼女の姿は見当たらなかった。私は彼女が来ないことを知っている。



それは卑劣さでも弱さでもない。ただ、彼女はここでは何もすることがないだけのことだ。愛とか名誉はこの場所ではなくなっている。私は、エルミオオヌが確かな動機を持つこともないままに、罪と復讐を追い求めるとは思わない、彼女がそんなことをしなければならぬのは、ここでもなければ、この瞬間でもないのだ。それでは、ロドリグならば？ 名誉のために闘わねばならなかった彼は、自分の命さえ懸かっていると感じていなかっただろうか？ 彼は、闘いに参加しなければならなかったのではないのか？ しかしロドリグは、ここにいなかった。彼は特異な闘いに、あるいは公明正大な戦場で奮闘していた。ここでは、闘いたるや戦士の闘いではないのだから。誰もが皆、私を見捨てていったのか？ 唯一人、アルセストだけが私に同行してくれていた。シェークスピアの妖精たちやマリボアの侯爵たち、騎士たちは、どうなったの？ 私は彼等の思い出を甦えらせながら、微笑んだ。ここ、シュレジアのこの凍てつくような夜、彼等の名前を呼び挙げるだけでは、とても失礼なことだった、引き込み線上の一貨車が、何百人もの女たちを、死へと送られる前のしばらくの間、拘束していた。さしあたり今は、運命、時として彼女たちのものではない運命——法的な過ちを語ることなく——へのヒロイズムを彼女たちは推し量っていた。

夜が深まってゆく、残酷な程長く、残酷な程静かで重苦しい夜が。アルセストは、このことに注意を払ってはいないように見えた、彼は、溢れんばかりの友情とともに、その平静さでもって私に付き添って話しながら、励ましてくれていた。彼のことを「人間嫌い」と言うのは、果たして正しいのだろうかと自問していた。彼の人間嫌いは、ある種の社会、特に軽薄でくだらない社会においていわれることだ。定められた運命の、ごく短い大切な時間に生きている私にとって、彼は人間関係における手本でさえあった。だが、私たちが見捨ててきた人々すべて、偉そうにしている人たちとさもしい人たち、ヒーローと周囲が求めてもいなかったヒロイズムに至らせてしまう人たちについて話そうとは私は取敢えてしなかった。アルセストを楽しませることができるとして、私のエスプリから逸れていった。私は彼にこう言った。

「アルセスト、どうしてそんなにも完璧に人々を避けるの、よりもよって、彼等が歴史の中で向上し、彼等の人生が彼等自身よりも偉大になる時代だというのに？」

「僕は人々を避けることを望んでいるんだ。もうずっと前から、僕はためらっているんだ。毎回、セリメーヌが僕を絶妙な技巧で引き留めるんだよ。今回は彼女も僕に対して何の力もない。ついに僕は、自分の自由を獲得したんだ。」

「あなたの自由ですって？ ここに来るのに？ 何故、砂漠の中でも最も致命的な所を選んだの？」

「何故って、それは本当の砂漠だから、人間独自の情念を決定的に駄目にする砂漠だからさ。ここでは、人間が人間性を奪い取ってしまう。ここでは、人間が自分自身であることを止めてしまう、ただもう、存在することを止めてしまう。」

「ああ！アルセスト！あなたは私たちが行くところ、でも、あなたが来るところで起こっている

ことすべてを知っているの？　そこで死ぬということが怖くないの？　まさに今、そこで死ぬことは恐ろしいことではないの？」

「何故、まさに今なの？」

「救いのない、破壊の運命に定められ、恐怖にさいなまれている今、人々——まだ、力尽きていない人々、まだ、闘っている人々——は、何故、自分達が闘っているのか、何故、命を賭けているのか、大いに知る必要があるわ。あなたは闘うに値する何かなの。そうよ、もう一度生き続けることができるまさに今、私が先刻あなたに言ったでしょ。あなたがセリメヌを避けているのは、分かる——実際に分かるのはまだかなり難しい——けれど、ジュベは？　彼に対してどんな不満があるというの？」

その時、大騒動が起こった。犬たちが唸り、怒って吠えている、その鳴き声を抑えようとする命令の声、馬たちが霜で凍った地面を重たげに蹴っているひずめの音が聞こえた。おお！何と寒かったことだろう！貨車の引き戸は滑り溝を走る。突然、冷たいすき間風が、寒さの中で過ごした身動きひとつできぬ数日間に巧みに手にいれたウール製品や毛布から私たちを剥き出しにした。かじかんだ足を動かす音、互いに身体を起こしたり、振りほどいたりするのが聞えた。戸が開けられた今、私たちの耳のすぐそばで、より高圧的な、より脅しのきいた命令に、理解できないまま私たちは付き従った。課せられた命令を理解することなく、私たちが眠っていた麦わらの中から急いでかき集めたスーツケースや散らばった品々を不器用に持ったまま、私たちは飛び降りていた。アルセストも私たちと同時に飛び降りた。彼は黒のマントに身を包み、その顔は一部分隠れていた。冬の夜の青白い明りの奥に、彼のシルエットが戸口にくっきりと浮かび上がっていた。私の眼にはとても身近な、ほっそりとした一つのシルエット。その彼が消えてしまった時、私は驚愕の叫びを上げそうになった。彼が素速い足どりで消えるのが見えた。一等の霊柩車のように、帽子とケープを腕に持って登場するアルノルフに少し似ている足どり、誰かに似ている足どり……それにしても、たった一つの仕草なのにこんなにも多くの類似点があるとは、どうしてありえたのだろうか？　アルセストは突然消えてしまった、まるで人が道の角を曲がる時のように。コーマルタン通りの角を曲がって消えたのはジュベだった。

アルセストは、列車を降りた時に見た悲しい光景に抵抗できなかったのだ。確かに彼は、砂漠の中に自分の孤独の理想を追い求めるもくろみを持っていたけれど、私が恐れていたように、彼は本当に人々から遠く離れて、人間性から遠く離れて生きてゆくことは出来なかったのだ。それに、ジュベの許へ行きたいという誘惑、それはまた避けたかった社会に復帰するためには正直な言い訳になるという誘惑があまりに強かったにちがいない。

#### E. 強制収容所から生還、シャルロットの部屋、アルセストの再登場<sup>(1)</sup>

ある朝、私の部屋に入って来て、私を呼ぶ何人かによって私は目覚めた。その声は、とてもはっ

きりしているにもかかわらず、低くこもっていた。その声は……私は、それに聞き覚えがあるような気がする。いや、聞き覚えはなかった。それは、忘れてしまった時間の響き、遥かに遠い時間に遡ってゆく響きを持っていた。それは、私の記憶の扉を叩いていた。そこに呑み込まれて、再び現実となるために、私の記憶の扉を崩れ落ちさせていた。突然、それは音量と色を、色と意味を持った。耳を傾けるいとまも与えず、私の知性を呼び起こすこともなく、それが言っていることを私は理解した。私はまだそれが誰なのか分からなかった、それを聞き覚えていることは確かであり、捜していた。それは誰？ ねえ、誰なの？

暗闇に亀裂が走った。「アルセスト！アルセスト！あなたなの？」まちがいない、アルセストが帰って来ていた。私のそばに彼がいた。彼の声はもっとはっきりしてきた、そして、あのアクセントすべてを見つけていた。「おお、アルセスト！あなたなの。それじゃあ、あなたはいつもそこにいるの？ 私のことを覚えている？」

「僕は君を覚えているよ。僕のことを忘れたのは君じゃないか。何故、僕を忘れようとしたの？」  
「ご免なさい、アルセスト——私は以前のように彼と親しく話していた——あなたのことを忘れようなんて決して思わなかったわ。何故、私のところに帰ってくるのにこんなに長い間かかったの？」

「僕は君から離れてはいなかったよ。戻ろうとしなかったのは君の方だよ。僕は君が君自身であった影の王国にいつもいたんだ。君が戻らなければ、僕はそこから戻っていないよ。」

アルセストは帰って来ていたのだ！私は彼がじっと食い入るように見つめていた。彼の顔立ち一つ一つを見分けたかったから。彼の声、しぐさ、はにかみ、私への友情、彼のすべてを再び見出していた。なんて幸せなのだろう！すべてが、私のところに帰って来ていた、話すための言葉と力、行うための行為と力が。私は、辛うじて自分の喜びを抑えていた。アルセストの前で……

だが、私の喜びはすでに冷めていた。何が起きていたのだろうか？

その朝、私達の間では、すべてが明白だったので、アルセストに勇気をもって訊ねた。

「あなたは帰ってきた……一人で？ それじゃあ、他の人達は？」

アルセストは私のベットの端に腰掛けて、私に一冊の本を差し出した。彼は私に一冊の本を差し出し、そして、私にすべての本を返してくれた。

## F. 記憶と現実、夫ジョルジュの不在<sup>02)</sup>

ああ、記憶が甦ってくる！そう、私は戻って来たのだ。だが、そのことをすぐ悔やんだ。何が戻って来たのだろうか？ 普通の暮らしが戻って来たのだろうか？ 多分、そうに違いない。だが、G.は、もういないのだ、どんな暮らしがあるというのだろうか。私は彼を忘れてしまうことを恐れていた、息をすること、食べること、期待をすること、忘れること、彼を忘れることを恐れていた。いいえ、忘れない。彼の思い出はあまりにも苦しくて、私はオンディーヌが羨ましくなる。彼女は

## 極限状況におかれた演劇人としての創作活動

水の底に潜るやいなや、忘れてしまうのだから。私はといえば、水面に浮上してしまう。私を愛したG.が存在したということ、私も彼を愛したということ、そして、彼が死へと向かう朝、彼と別れても私は死んでいなかったということを物語る、物、色、記憶、提携、喚起の、鋭く危険な尾根が、私を取り巻いているすべてだった。

ルイ・ジュベ宛のこの手紙は、1951年彼の死によって、書き終えることも、送ることも出来なかった。あらゆる思い出が蘇ってくる今日、私はここに発表する……

パリ 1975年

### 注

- (1) 鹿瀬颯枝「1995年・パリ日記（抄）」、『聖学院大学総合研究所 Newsletter Vol. 6-2』, 1996年, pp. 32-33
- (2) Todorov, T., *Face à l'extrême*, Paris, Seuil, 1991  
T. トドロフ著, 宇京頼三訳『極限に面して—強制収容所考』ユニベルシタス叢書382, 東京, 法政大学出版局, 1992年, p. 113
- (3) 1995年9月20-22日, ランス大学で開催された国際シンポジウム「生き残るための創作活動」のレジメより。報告書は未公開, 未入手。詳細は, 後日の機会を待ちたい。
- (4) 『極限に面して—強制収容所考』 p. 114
- (5) 「亡霊たち」“Spectres”は, シャルロット・デルボ『亡霊たちよ, わが仲間たちよ』に登場する古典劇の主人公たちを指す。後に訳出する「まえがき」(3頁)を参照。アウシュヴィッツへの絶望の旅の同伴者たち。特に, ここでは, 『人間嫌い』のアルセスト。
- (6) 「生き残るための創作活動」におけるロゼット＝クレマンチヌ・ラモン教授 (City University of New York) の席上発言より。シャルロット・デルボの良き理解者であり, 研究者, 翻訳者である。
- (7) Delbo, C., *Spectres, mes compagnons*, Paris, Berg International, 1995, p. 5  
1996年2月17日, パリのロン・ポワン劇場にて, タニア・トラン Tania TORRENS の朗読による『亡霊たちよ, わが仲間たちよ』を聴く機会を得た。その機会を基にして本稿を執筆。
- (8) Ibid., p. 7
- (9) Ibid., p. 26-31
- (10) Ibid., p. 31-35
- (11) Ibid., p. 48-49
- (12) Ibid., p. 50